
サイダー

KOU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイダー

【著者名】

Z0329Q

【作者名】

KOU

【あらすじ】

ふと、甘いにおいが鼻についた。目を開けると、隣の女性が缶のサイダーを飲んでいた。

その女性は、少しだけ顔を傾けて、こくつこくつとサイダーを飲む。僕は茫然と、彼女がサイダーを飲んでいる姿を眺めていたが、驚くほど白いのどが視界に入り、思わず顔を背けた。いや、実はそれが原因ではない。その女性は、僕の記憶の中にいる、？だれか？によく似ていたのだ。

これは、僕と彼女の物語。

KOTOKO「サイダー」の音楽イメージ小説です。

ふと、甘いにおいが鼻についた。目を開けると、隣の女性が缶のサイダーを飲んでいた。電車の中という公共の場での飲食は感心しないが、扉の前に座り込んでいる女子高生や目の前で姦しくしていわおばちゃんの方がよっぽど迷惑である。ので、気にしない。

その女性は、少しだけ顔を傾けて、こくつこくつとサイダーを飲む。僕は茫然と、彼女がサイダーを飲んでいる姿を眺めていたが、驚くほど白いのどが視界に入り、思わず顔を背けた。いや、実はそれが原因ではない。その女性は、僕の記憶の中にいる、？だれか？によく似ていたのだ。肩まで伸ばした黒いストレートの髪、大きな二重の瞳、きゅっと結ばれた唇の端……横顔ではあるが、彼女は？だれか？が成長した姿そのものだつた。

もちろん、そんな訳はない。？だれか？はこんなところで電車に揺られている訳ないのだから。

だから……僕は、彼女を意識しないように、目を閉じた。

電車が目的地に到着する。僕が降りようと立ち上がると、彼女もほぼ同時に立ち上がつた。ぎょっとして目を剥ぐが、何のことはない。彼女と僕の目的地が一緒だつただけだ。、この駅の最寄にある大学に通つているのだろう。この電車の到着時刻は講義の開始にはちょうどいい時間帯なのだ。僕たちと同じように、乗客のほとんどが腰を浮かしていた。彼女もその中の一人に過ぎない。偶然？だれか？に似た彼女が、偶然僕と同じ学校に通つていて、偶然今日は隣に座つていて、偶然サイダーを飲んでいた。ただそれだけだ。他意はない。

しかし、僕はその偶然を意識せずにはいられない。じくじくと、得体の知れない感情が侵食していく。動悸が早くなるが、僕は必死

にそれを押さえ込む。扉が開くと、何かから逃げるよつて、早足で改札を通り抜けた。

学校への道すがら、一度だけ後ろを振り返ると、彼女はゆっくりと典雅に、歩みを進めていた。彼女はたくさんの人追い抜かれるが、そんなこと気にも留めず、自分のペースを守り続いている。

……まったく。どうしてそんなところまで似ているんだ？

僕はさらに足を速める。やがて、彼女は見えなくなつた。

今日の講義は一時限目と三時限目にあり、二時限目は空いている。いや、今日に限らず、毎週火曜日はいつもそうだ。つるんんでいる学科の友人たちは、二時限目も講義を入れており、必然僕は一人暇を持て余すのが日課……というか、週課になつていてる。

時間の潰し方は様々で、図書館に行つたり、購買の書籍部で立ち読みしたり、PCルームでパソコンをいじつたりするのだが、今日は穏やかな天氣で気分が良かつたため、中庭のベンチに座つて本でも読もうかと考えた。

書籍部で薄めの文庫本を購入し、中庭に向かう。買ったのは最近流行の青春小説だ。こんなに晴れやかなのに、まさか血みどろのミステリを読むわけにはいかない。血みどろは好きだけど、僕だつてTPOくらいはわきまえる。

中庭は、芝生の広場の周りにベンチが設置されており、僕と同じように暇を両手に抱えきれないくらい持て余した学生たちによって、占拠されていた。この中で、僕と同じように二時限目が空いている人間は何人いるのだろう？ きっと、講義をサボつてタバコを吹かしに来ているだけだろう。

視線を廻らせて、空いているベンチを探す。出来るだけ、あの紫煙がたゆたつている一団からは離れたい。そうして視線を走らせた先には……。

彼女が、いた。

「…………」

思わず息を呑んだ自分に驚いた。

彼女は独りでベンチに座り、厚いハードカバーの本を読んでいた。立ち去ろうと思った。しかし、意に反して、足は動かない。目も動かない。僕は、この場所、この時間に固定されてしまった。

彼女は足を組んで、伏し目がちに本の文章を追っている。その姿はまるで、一つの完結した絵のよう。そのまま切り取つてしまえるぐらい、その絵はその絵だけで完結していた。

そして傍らには、先ほどと同じサイダー。甘くて、幼い飲み物。

「ひひ……ぐすっ。ありがと。」

「 ぐ……」

「一人でいつしょに飲もうね。」

「 つあ……」

それは、いつかの。

守られなかつた、約束だ。

堤防が決壊した。先ほどは抑えられた感情が、濁流になつて、裡に流れ込む。僕の心身はその濁流に耐え切れない。

遠くで、誰かの悲鳴が聞こえた気がした。そちらを振り向こうとした時、既に僕の目の前には地面がそびえ立つっていた。

意識が、消えた。

目が覚める。頭の奥底に、重たくて鈍い痛みが横たわっている。頭の下には、柔らかな感触。やさしくて淡いシャンプーの匂いが鼻

腔をくすぐる。そして、視界には白いのぞ……。

「あ、気づきましたか？」

身じろぎをする僕に気づいた彼女が、下を向いた。このときになつて、僕はよつやく彼女に膝枕をしてもらつてることを理解した。

「 」

顔に熱が溜まつていいくのが分かる。要するに、照れている。僕は今まで女性経験が豊富だった訳ではないし、もちろん膝枕されるのも初めてだ。そして、彼女の白いのぞは、あまりに綺麗過ぎて……。

「あの、じ気分はどうですか？」

「え、ああ、うん、大丈夫」

どもりながら、答える。僕は相当、慌てている。

「いきなり倒れられたのでびっくりしちゃいました」

口々口々と彼女は笑う。……その笑い方も、？誰か？にそつくりだ。

「あ、ありがとうございます」

僕は頭を起こす。じぐじくと、弱い痛みが明滅しているが、耐えられないほどではない。

「まだ無理をなさらない方がいいのでは？」

「いや、もう大丈夫。ありがとうございますと……」

「わたし、植田和端うえだ かずはといいます」

「かずはが帰つて来ない」

そう聞いたのは、ある日の夕方だった。

かずはのお父さん、お母さん、近所のおばちゃん、おじちゃんがみんな心配していた。かずははいつも、4時には帰つて来る。そういう約束を、お父さんとしていたからだ。しかし今日はもう、6時を過ぎているのに、かずははまだ帰つて来ていなかつた。

みんな、かずはを探しに行つた。近くの公園、学校、川辺……。

そんなところにかずはは居るわけないのに、みんなそんなところを

探していた。

おれだけは知つてゐる。かずはとの秘密基地を。

「浚井さんは経済学部なんですか」

大学の広場のベンチ。僕はそこで植田和端さんと他愛ない話をしていた。僕の体はもう特に問題はないが、助けてもらつておいて、ハイさよならという訳にはいかない。植田さんはどうやらお喋りをしたい様子だし、しばらく付き合うことにしたのだ。

「わたしは文学部です。主に国文学を勉強しています」

ベンチはさほど大きくなく、僕と植田さんの肩は、何かを間違えたら触れてしまいそうな距離にあつた。その距離故か、僕はずつと緊張しつぱなしだった。単純な距離で言えば、朝の電車で隣り合つたときの方が近いのではないか。

当然といえば当然だが、彼女はおそらく今朝、電車で僕が隣に座つていたことは覚えていないようだ。いや、覚えていないとうか、知らないのだろう。僕だって、植田さんがかずはに似ていなかつたら、隣に座っている人間になんて、興味を示さない。

「植田さんは今何回生?」

「今年、入学したばかりです」

つまり、一回生ということであり、現役合格しているなら18歳ということだ。いや、既に誕生日を迎えていたら19歳か。

「そうなんだ。学校には慣れた?」

「はい。結構面白いです」

結構面白いです、か。なかなか微妙な表現をする子である。ともかく、

「それは良かつた。大学つて、あんまり面白くないって言う人が多いから。いや、遊ぶ人は遊んで楽しそうだけれど、それは大学が楽しいっていうわけではないから」

「だつて、こんなに広いんですから」

……。植田さんの言葉の意味を考える。どうやら彼女は比較的、論理が飛躍しやすい……というか、言葉が足りないようだ。ええと、『こんなに広いから』なんだつていうんだ？

「うちの田舎を思い出します」

「ああ、そういうことか。『うちの田舎を思い出す』から、面白いわけね。……それは面白いといつのだろつか。

そんな実益もない会話を続いている裏側で、僕は植田さんとかずはの相似点を感じずにはいられない。例えば会話の中で言葉が足りず、意味が分からなかつたりとか、実家が田舎だつたりとか、かずはとの年齢の一一致だとか。

「いやー

突然、ネコが足元に躍り出た。近所のノラネコが迷い込んだのだろう。あまり毛質が良くない三毛ネコだが、愛嬌のある顔をしている。

「おいで」

手を差し出したそのとき、左の一の腕がぎゅっとつかまれた。驚いて振り向くと、植田さんが俯いて、震えている。「ごめんなさい……」と、小さく呟く。

僕は差し出した手を裏返して、ネコを追い払った。三毛ネコは「なんだよ、自分から誘つておいて」という表情を一瞬浮かべ、名残惜しそうに去つて行く。彼……あるいは彼女には心の中で謝つておく。

三毛ネコの尾が見えなくなると、ようやく植田さんは僕の一の腕を離して、安堵のため息を吐いた。

「ごめんなさい。わたし、ネコさんは昔、ちょっと色々あって、苦手なんです」

おれたちの秘密基地は、少し遠くの公園の、小さな森の中にある。そこは背の低い木々に囲まれていて、少し細工をすれば外から中は

まったく見えなくなつた。おれたちはそこに色々なものを持ち込んで、おれたちだけの秘密基地にしたのだ。

おれの思つたとおり、かずはは秘密基地にいた。

ただ、秘密基地にいたのはかずはだけではなかつた。

「ふーー！」

ネコが総毛立てて、秘密基地の入り口から中を睨み付けていた。耳から尻尾まで、全身びんびんだ。

「えぐ……えぐつ……」

そして、中からはすり潰したような泣き声。かずはだ。かずはがネコに怯えて、泣いている。

「ひらつー！」

僕はネコに怒鳴つた。かずはを泣かしたネコに、腹が立つたのだ。ネコはゆっくりこちらを向くと、今度はおれをその鋭い眼光で射抜いてきた。おれのことを敵と認識したようだ。

しまつた、と思ったときには遅かつた。ネコはネコ科特有のバネを活かして、おれに襲い掛かつてきた。

果たしておれとネコの決闘は、文字通りの意味で、血で血を洗う激しいものとなつた。流れた血は主に……といふか、すべておれのものだつたが。何とかネコを追つ払つたときには、おれは全身ひつかき傷だらけだつた。

「かずは？」

痛くて泣きそうになるのを必死で堪えて、秘密基地の中に呼びかける。

「ネコ追つ払つたから、出ておいで」

中で何かが動く気配。数秒して、かずはが四つんばいで恐る恐る出てきた。

「ネコさん、いない？」

「うん、もういない」

おれは頷いて答える。かずはは大きな瞳にいっぱい涙をためて、言つた。

「帰らうと思つたら、ネコさんか通せんぼしたの。ネコさんなんて、
だいきらい」

あの時の傷が少し痛んだ。気がした。もう十年以上前の傷だ、治つていなければずがない。にも関わらず、顔をしかめてしまつて、それを彼女に見咎められた。

「あの、どうしたんですか?」

「いや、僕もネコにはあまりいい想い出はないんだ
ひつかかれたし、とは言わなかつた。

「そりなんですか? ジャあわたしと一緒にですね」

彼女は笑う。

「ネコさんにはたくさんたくさん泣かされました。かわいい、って
いうのは分かるんですけど、どうも体のほうに染み付いていて
「えつと、どんなことされたの?」

体に染み付くくらいの苦手意識なんて、そういうあるもんじゃな
い。『通せんぼ』でもされないくらいじゃないと。
僕が尋ねると、植田さんは頬を染めて、答えた。

「それは秘密です」

……気になるが、言及するのはやめておいた。

「でも、浚井さんはすこいです。ネコさん、苦手なのに追いつめたり出来るなんて」

「いや、苦手つて訳ではないんだ。ただ、いい想い出がないってだけで」

ひつかかれたという嫌な想い出があるのは確かだが、ネコにひつかかれたなんてことは、僕のたくさんある想い出の中でも極めて些細なもの過ぎない。トライアゴになるほど、心の中で面積を占めていない。

「それ、見習いたいです」

植田さんはそう言って、鞄の中をじしゃーと漁り出した。何が出て

くるんだ?と訝しんでみると、田ジュークをすい、と差し出された。

「……なに、これ?」

「サイダーです」

「それは分かるけど」

いつたい、今の文脈をどう解釈したらサイダーが出てくるんだ?
「お礼です。ネコを追つ払つてくれた」

「ほら、もう泣くなつて」

秘密基地を後にして、とぼとぼと夕暮れの町を一人で歩く。影が
不気味におれたちのあとを着いてくる。かずはまだ先ほどの恐怖
から抜けきれないのか、ぐずぐず泣いていた。

「つたく……」

おれはまっすぐ家に帰る予定を変更して、寄り道をすることにした。
途中の小道を曲がる。かずは進路を変更したことすら気づか
ず、俯きながらおれの手を握つている。

「おばちゃん、サイダー一本ちょうどいい」

おれが目指したのは、なんのことはない。近所の駄菓子屋だつた。
声をかけると、のれんの奥から恰幅のいいおばちゃんが姿を現した。
「あら、禎杜くんじゃない。いらっしゃい」

「サイダー一本ちょうどいい」

もう一回言うと、おばちゃんは首をかしげて、

「一本でいいの?」

「うん、一本でいいよ」

おばちゃんの疑問はもつともだ。だって、おれたちは一人いるの
だから。しかしども残念なことに、おれの財布には今156円し
か入つていないので、100円のサイダーを一本も買えない。

おれは財布から100円を取り出し、おばちゃんに手渡す。おば
ちゃんは「はいはい」と言いながら、冷蔵庫から瓶のサイダーを取
り出して、栓抜きで栓を空ける。

「はいどうだ

「おばちゃん、ありがとう」

サイダーの瓶を受け取ると、中からシコワシコワと泡の音が聞こえてきた。そして、甘いにおい。

「かずは、ほら」「ひ

未だに泣いていたかずはに、サイダーを差し出す。サイダーはかずはの好物なので、機嫌を直してくれると思ったのだ。左腕で目を拭つていたかずはは、それに反応して、涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔をこちらに向けた。

「……くれるの？」

「ああ。だから、もう泣くのはやめな

ぐすぐすっと鼻水をすすって、かずははサイダーを受け取る。

「うう……ぐすっ。ありがと」

「どういたしまして」

かずははさしそく、サイダーに口をつけた。小さな小さなのどまとけがこくつと動く。それがやけに眩しかった。

そしてかずはは、目元には涙のかけらを残しながらも、嬉しそうに微笑んだ。

「おいしい」

「当たり前だ。おれがごちそうしてあげただだからな

意味の分からない理論だ。しかし、これくらいの意味のない血膿は許されるだろう。

「よしくんの分は?」

かずはは大きな瞳を開けて、おれに問いかける。

「おれはいいよ。のど、渴いてないし」

お金がない、とは言えなかつた。そんなのは恥ずかしかつたし、男の子には弱みを見せてはいけないという意地があるので。

「……いらない?」

かずはは、まだ半分ほど残っているサイダーの瓶を傾ける。おれは首を横に振つて、

「おれのことはいいから、かずはが全部飲んだらいいよ」

「……じゃあ今度は、かずはがよしきんにサイダーあげる。それで

おあい！」

「べつひここよ」

「だめ。かずはだけサイダーもひつたら、フロウヘイだもん」
ふくーっと頬を膨らますかずは。かずはは「いつなるときかない。

「わかった、楽しみにしどく」

「で、そのあとは一人でいつしょに飲もうね」

「一緒に？」

「うん、おあいこにしたあとで、こっしょに飲むの。ね、いいでしょ？」

「うん、いいよ」

おれがそう答えると、かずはは嬉しそうにおれの右手の小指を握つて、ぶんぶんと振り回した。

「約束だよ！」

僕は差し出されたサイダーの缶を思わず受け取ってしまった。

「（）一緒にしたかったところですけど、残念ながらそれが最後の一本です。あ、遠慮なさりすゞうぞ」

鞆の中をがさごそ漁りながら、植田さんは言つ。

「えーと、今日は残念でしたけど、もし浚井さんがよろしきのでしたら、今度一緒にどうですか？　わたし、おこしいサイダーを出す店を知つてゐんです」

「え……」

心臓が脈動する。それは、あの時の約束の再現に他ならない。結局果たされる」とはなかつた、約束の。

「一人でいつしょに飲もうね？」

「ダメ……ですか？」

植田さんは上目遣いで僕に尋ねてくる。僕はそれに答えられない。

呼吸を維持するのもやつとな状態だった。

脳裏には色々な思考が渦巻いている。僕はどうするべきなのか、僕はどうしたいのか。

あの時果たせなかつた約束を、今こそ果たすときではないのか？
しかし……。

「ごめん、植田さん」と、僕は切り出す。

「それは、約束できない

「どうしてですか？」

「君の提案はとても魅力的だ。それこそ、気が狂いそうなくらいに。正直な話、僕も君と一緒にサイダーを飲みたい

「だったら……」

「それでも……僕は？彼女と？約束したんだ」

僕は、かずはと約束した。一緒にサイダーを飲もうと。たとえ、植田さんがどれだけかずはと類似点があるうと、植田さんは植田さんだ。10年前に死んでしまつた人間の代わりにはなれないし、新たに植田さんと約束を交わすということは、死んでしまつたかずはへの冒瀆になつてしまつ。

僕はこれからずつと、一生果たされることのない約束と一緒に生きていかなければいけないので。それが、かずはにしてあげられる僕の、唯一の供養だと思う。

「……そつか、他にいい人がいたんですね」

植田さんは少しだけ寂しそうに目を伏せた。

「じゃあ、しょうがないですね」

「ごめん

「いえいえ、謝らないでくださいよ

淡く微笑んで、彼女は左腕の腕時計に視線をやる。

「わたし、そろそろ行きますね」

「あ、うん」

「いろいろお話ししていただいて、ありがとうございました。また見掛けたら、声でもかけてください」

「うん、こちらこそ。サイダー、ありがとうございます」

「それでは、失礼します」

ペコリとお辞儀をして、彼女は去つていった。

彼女が去つたことで、僕は独りになった。植田さんはああ言つたが、もう一度と僕たちが出会うことはないだろう。いろいろと積み重なつた偶然を、僕は拒絕したのだ。再びその偶然が僕たちに訪れるることは、ない。

結局、植田さんは僕にとつて何の意味を持つていたのだろう？
これだけの偶然が重なつたのだ、何かしらの含意を感じずにはいられない。小さく折りたたまれた意味が、たぶん今日の出会いには含まれている。

あるいは、この出会いは運命だったのか。僕が？おれ？を再び始めるための。しかし、どちらにしろ僕はそれを拒否した。僕はこれからも？僕？を続ける。？おれ？には戻らない。

右手のサイダーを見る。フルタブを空けて、口に運ぶ。

久しぶりに飲んだサイダーはひどくぬるくて、幼くて切なくて、そしてほろ苦かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0329q/>

サイダー

2011年1月8日14時55分発行